

富田一彦 著

『試験勉強という名の知的冒険』

(大和書房)

『近日入荷予定』

本当は人に知らせず密かに愛読したい類の本がこれ。筆者は知る人ぞ知る受験英語指導の第一人者。勢い実用書・参考書まがいかと思いきや、どっこい極めて質の高い知的読み物である。しかも、生徒(そして教師も)の「そこが知りたい」という所を見事に語りつくしている。著者は私の一つ上の現役教師。一体全体英語の問題が、どう作られ、仕掛けはどこにあり、生徒が何に弱いか知り尽くしている。そんな「手の内」を堂々と紹介するのは超弩級の実力のある証拠だ。生徒諸君は、肩を張らずに、約二五〇頁に散りばめられた例題をどれからでもいいから解いてみてほしい。長々しいものは無く、それでいて後続の説明に対応する論点はきちんと備えている問題ばかり。筆者の解説は、「あっぱれ」と言いたくなるもの。おそらくしゃべらせても聞き手をうならせるに違いない。

読書案内

「新大阪を出た新幹線は東京に行くか博多に行くか?」なんて問題も扱う茶目つきの持ち主。なんと恐るべし。自分の名前をその名に充てた単語集「とみ単」は、名前のヒョウキンさに似合わず、類書に無い

素晴らしさだ。同業者としても、拍手を送りたくなる。前著とともに、北野生が読んで、即実践に移せるネタが縦横無尽だ。私は教師だが、すでにその「実践」を始めている。なお、北野生が手に取りやすいよう、近日購入リンクエストを予定しています。

村上春樹 著

『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』 村上春樹インタビュー集1997-2009

(文藝春秋)

『910/M51/1』

皆さんご存じの通りノーベル文学賞発表前の期待感が年々膨らむ作家ですが、メディアへの

露出度は非常に低く、にもかかわらずメジャーな人気を誇る不思議な存在です。そんな作家の18のインタビューを集めたのが本書。うち12のインタビューは海外のメディアに向けたもので、翻訳も多く手がける村上春樹が通訳を介さず受け答えし自ら日本語に訳し直しているの、発言は100%彼の言葉といつていいでしょう。

もちろん小説を読むのが一番面白いのですが、平易かつロジカルな文章を積み上げ思いがけない世界へ連れて行ってくれる(そしてそのまま置き去りにされることもある)村上ワールドを、インタビューですから現実世界にいながらにして味わうことができるのは読者にとつて魅力的。村上曰く、その「思いがけない世界」は誰もが持つ想像世界であり無意識下の形而上学的な世界だけれど、誰もが自由に行き来できるものじゃない。小説家というのはそういう空間に自在に行って帰ってこられる技術を持つ人間なのだとのこと。作品に対する姿勢を慎重に言葉を選び語る様子は読者に対する彼の姿勢の現れでもあり、文学をこんな風に真摯に、時にはユ

ーモラスに説明してくれる作家がいることに嬉しくなりますが「インタビュー集」なので同じ話が重複すること、話に出てくる小説を全部読み返さずにはいられなくなることがやや難点。

中島敦 著

『山月記』

(新潮文庫)

『913/N3/2』

山月記は中島敦が「文学界」に発表した小説である。

主人公の李徴は、エリート官僚で若くして出世したが、彼は、死後に残る名声を求めて官僚を辞め、詩作に励んだが、人々の批評に傷つくことを恐れたためか、詩家としての名声は得られなかった。そして、再び地方の役人になったが、官僚時代の部下が上司になっていたの、自尊心の高い李徴は耐えられず、行方不明になった。

ある日、李徴の友人が、虎になつた李徴に出会う。李徴は友人に、人間だった時に尊大だったのは、臆病と羞恥心の表れであつたことを言います。自分は

文学に対して才能がないと気づくのを恐れて本気でしなかったし、また自分の才能を過信するあまり人と交流しなかったと言いました。でも李徴は、虎になつてしまった今、才能を絶え間なく磨き努力すれば、もしかしたら有名な詩家になれたかもしれないと後悔していました。

時に人間は決断に迫られ「悟る」場面があります。「悟る」とは、自分自身を客観的に分析することです。でも、これが難しい。なぜなら「自尊心」が邪魔をするからです。「自尊心」は人間にとつて大切ですが、山月記の李徴のように、時には邪魔になることもあります。

逆境の時は、「自尊心」を忘れずに前に進み、慢心した時は「自尊心」を捨て、謙虚で、初心を忘れない。そのことを肝に銘じて、自分らしく、かけがえのない人生を歩みたいと、この作品を読み、私は感じました。



河野裕子 著

『桜花の記憶―河野裕子エッセイコレクション』(中央公論新社)

[914/K59/1]

「たとへば君ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか」

私が河野裕子を知ったのは、この一首によつてでした。「君」と呼ばれるのは、歌人にして生物学者でもある夫・永田和宏です。河野自身もさることながら、この夫婦がまた、素敵。

本書では河野二十七歳の頃から、乳癌で亡くなる直前の六十四歳までのエッセイが集成されています。長年の記事に通底するのは、「生きる」ことの麗しさと酷さ、その両者をひっくりめてしまう「寛(ゆた)けさ」です。

本書にはありませんが、河野の辞世歌は、
《手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が》

死の床で、絶え絶えの声で紡ぎ出された一首は、夫や子らの手によりこの世に記し留められま

した。そのち夫・永田和宏が詠んだ、

《わたくしは死んではいけないわたくしが死ぬときあなたがほんたうに死ぬ》

この永田の一首と、

《生きている間は、自分の死はひとり自分だけのものなのだが、死んでしまった瞬間から、死は自分のものではなくなるからである。》(本書「私の墓は?」)

という河野の生前の言葉とは、奇妙に符合します。

うむ、やっぱり素敵夫婦。こんな家庭を築けたらええなあ。。。短歌、そしてエッセイという手法で一瞬一瞬の「生」を切り取った河野裕子を、皆さんの若い感性がどう捉えるのか、とても興味があります。ぜひ、今、手にとってほしい一冊です。

神谷美恵子 著

『生きがいについて』

(みすず書房)

[493/K11/1]

神谷美恵子(1914-79)

さんは、津田英学塾卒業後間もなく肺結核にかかり、主に山の

中で何年か療養生活を送りました。当時は結核のいい療法がなかったので、若くして逝った人が多かった中、彼女は癒され、なぜ自分だけがという負い目が

ずっと心につきまといっていたそうです。彼女が初めてハンセン病の存在を知ったのは、津田英学塾二年のときで、叔父と多摩全生園を訪れたときでした。そのときに、将来は看護婦か医者

になりたいと考えたが、周囲の反対と自身の病気のためなかなか実現しませんでした。その後、

コロンビア大学の大学院で古典文学を専攻。しかし、途中で父親の許しを得ることになり、医科への転向を果たすことになりました。

この本は、彼女がハンセン病患者の生活する長島愛生園の精神科で勤務し、生きがいを喪失した多くの人達と関わることでなった経験をもとに書かれています。少し専門的などころもあるのですが、とても胸に落ち迫る本です。

最後の章で、彼女は次のように語っています。

『人間の存在意義は、その利用価値や有用性によるものではない。野に咲く花のように、ただ

「無償に」存在しているひとも、大きな立場からみたら存在理由があるにちがいない。

自分の眼に自分の存在の意味が感じられないひと、他人の眼にもみとめられないようなひとでも、私たちと同じ生をうけた同胞なのである。もし彼らの存在

意義が問題になるなら、まず自分の、そして人類全体の存在意義が問われなくてはならない。』

井上太郎 著

『ハイドン 106の交響曲を聴く』

(春秋社)

『近日入荷予定』

ハイドンの交響曲は

一般に104曲とされるが、本書はそれに初期の2曲を加えた106曲に解説を加えている。一曲あたり1〜3

ページでまとめられていて、それぞれの曲の特徴をつかむのに便利である

ハイドンの交響曲は

読書案内

発表当時から人気が高く、106曲のうち28曲もの作品にニクネームがつけられている(このうちハイドン自身がつけたのは3曲のみ)。「驚愕」「軍隊」「時計」など有名な曲以外にも楽しい作品がいっぱいあるのである。ハイドンの交響曲全集は二種類(フィッシャー指揮とドラティ指揮と)がCDで出ている。実際に曲を聞きながら本書を読むことをお勧めする。

106曲も聴くのは大変のように思われるが、ハイドンの曲は聞きやすく楽しい曲が多いので全く苦にならない。

日本におけるクラシック音楽、特に交響曲の受容は、ベートーヴェン以後の深刻・壮大なものを中心としてきていて、交響曲の父ハイドンの遺産の大部分はそこから抜け落ちてしまった。

これまで主にモーツァルトについて多くの本を執筆してきた著者が本書を著した理由は、ハイドン没後二百年になるのに日本語で書かれたハイドンの全交響曲の解説書が1冊もない不自然さに気付いたためだという。

パパハイドンと呼ばれて親しまれた「交響曲の父」ハイドンの曲に親しむのに恰好の本である。


